

カッコウ *Cuculus canorus* Linnaeus

【選定理由】

愛知県では主に 1,000m 程度以上の標高にある開けた環境を好んで生息しているが、平野部では過去に尾張や西三河の一部でも繁殖していた。近年は平野部での生息がほとんどなくなり、高原での生息数もかなり少数であることから、県内の繁殖個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。通過個体群も減少していることから、準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 35cm。頭から胸及び背から上尾筒は淡い灰青色、翼と尾は灰青色味を帯びた黒褐色。腹は白く黒褐色の細い横斑があり、眼と口元は黄色。幼鳥は全体に褐色味があり、上面の各羽に羽縁がある。近縁のツツドリやホトトギスによく似ているが、体色が淡く腹の横斑が細い。比較的目立つ場所に止まり、翼を下げ尾を上げて轉る。



長野県, 2014年6月21日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

渡りの季節は県内全域で確認されるが、繁殖期に観察されている場所は西三河および東三河の標高 600m 程度より高い場所にある比較的開けた環境と、尾張西部の木曾川河口周辺やみよし市周辺の境川沿い、岡崎市周辺の矢作川沿いなどである。

【国内の分布】

ほぼ全国で繁殖する。本州中部以南では主に 1,000m 程度以上の標高で繁殖しており、それより北では平地でも繁殖している。

【世界の分布】

ユーラシア大陸の北部や南部を除いた部分とアフリカ大陸の北端で繁殖し、冬期はアジア南部やアフリカ南部などで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

カッコウの仲間は自分で抱卵・育雛をせず、他の種の鳥に托卵して繁殖する。県内で標高の高い場所に生息するものは主にモズやホオジロに托卵しているようであるが、平野部で繁殖するものはオオヨシキリに托卵している。生息環境も、標高の高い場所では牧場のように開けた草地と疎林のある環境が多く、平地ではヨシ原と疎林が混在する環境である。食性は主に昆虫食で、カッコウの仲間は特に、蛾の幼虫である毛虫を好むことが知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、繁殖期に平野部で生息する個体が減少し、現在ではほとんど観察されなくなった。要因として、オオヨシキリが繁殖できる広いヨシ原の減少や消滅が考えられる。標高の高い場所でも生息数は減少しており、要因として牧畜産業の衰退や、観光開発などによる生息環境の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

本種のような托卵性の種では、当該種だけの保全対策を考えても無意味である。被托卵種の生息環境が十分保全されていなければ逆効果であり、托卵種が増加することで被托卵種がさらに減少して、結果的に托卵種の絶滅につながってしまう。

【特記事項】

茶臼山の長野県側にある売木村では、モズの巣の中にある卵が全て本種のものであったという観察例がある（大内秀之,私信）。同じ場所で繁殖を始めたチゴモズは1年で姿を消している。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.42. 文一総合出版, 東京.

（高橋伸夫）